

がっこう
学校だより

くすのき

がっこう
6月号



れいわ ねん がつ にち
令和5年 5月31日

よこはましりつほんもくみなみしょうがっこう
横浜市立本牧南小学校



ホームページはこちらから! 随時更新中→

『ふたりのももたろう』

こう ちょう なか むら ひろし
校 長 中 村 宏

ほんもくみなみしょうがっこう
本牧南小学校では、子どもたちの豊かな心を育むため、年に2回の人権月間(週間)があります。5月31日現在も人権月間中です。そこでいくつかのクラスに『ふたりのももたろう』というお話をさせてもらいました。この『ふたりのももたろう』は、珍しい本の構造になっていて、1冊に2つの物語が入っています。といっても、普通に2話が続くわけではありません。この本は、屏風のようなじゃばらづくりになっています。鬼退治をするいわゆる普通のももたろうのお話が終わったあと、ページを折り返して裏面に書かれたもう1つのお話を読むことができます。

お話は、おばあさんが川からももを引き上げてその場を離れた後、実はもう1つのももが流れてきて、鬼ヶ島に漂着するところから始まります。そして、鬼ヶ島に着いたももから生まれたももたろうは、鬼によって大切に育てられます。鬼に育てられたももたろうは、成長の過程で自分が周囲の鬼たちと異なることに戸惑います。育ての鬼は、ももたろうにこう伝えます。

『ちがっていてもいいじゃないか』

ももたろうは他者との違いを認め共感することができる子に育ちます。やがて人間に育てられた、いわゆる普通のももたろうが鬼退治のために鬼ヶ島にやってきて、2人のももたろうが対峙するところでお話は終わります。この本を紹介し、私が感じたことを3つ話しました。

1つ目は、『1つのものごとに、異なるいくつかの見方がある』ということ。

2つ目は、『自分と相手の違いは、ちょっとしたことで生じている』ということ。

3つ目は、『違いを認めることで、社会が豊かになる』ということ。

別視点のももたろうは、育ててくれたみんな(鬼)と違ってツノがないことに悩みますが、鬼から違いを認めることの大切さを教えてもらいます。自分が違いを認めることは、自分の違いを認めてもらうことの裏返しであり、自分自身の生きやすさにも繋がります。『ちがっていてもいいじゃないか』鬼がももたろうにかけた言葉は、胸にぐっとくるものがありました。

多様性を重んじる時代になり、相手の立場になって考え尊重するという意味で、共感する力がとても大切になっていると感じます。一方で、多様性の時代において、共感することはますます難しくなっているのではないかと感じています。共感する相手が多様で複雑になればなるほど、相手の立場になって考えることが難しくなるからです。これからの時代を生きていく子どもたちは、共感する力が足りないがゆえに、知らず知らずのうちに誰かを傷つけてしまったり、逆に傷つけられたりすることも考えられます。だからこそ、本牧南小人権月間を機に『相手の立場になって考える』という、当たり前のことを考えるきっかけにしてほしいと思い、この本を紹介しました。機会がありましたら、是非読んでみてください。

(※表紙絵・内容ともに発行所の許可をとって掲載しています。)

